

支援社会のために

三月二十六日から連載した「時流の先へ 中部財界ものがたり」第六部では、森村グループで衛生陶器の東洋陶器（現TOTO）などを立ち上げた大倉和親の活躍を取り上げた。大倉は愛知県常滑市の土管工、伊奈初之丞、長三郎親子（ともに故人）を支援し、タイル製造の伊奈製陶（後のINAX、現LIXIL）の礎も築いた。大倉と伊奈製陶を結んだ固い絆をたどる。（平井良信）

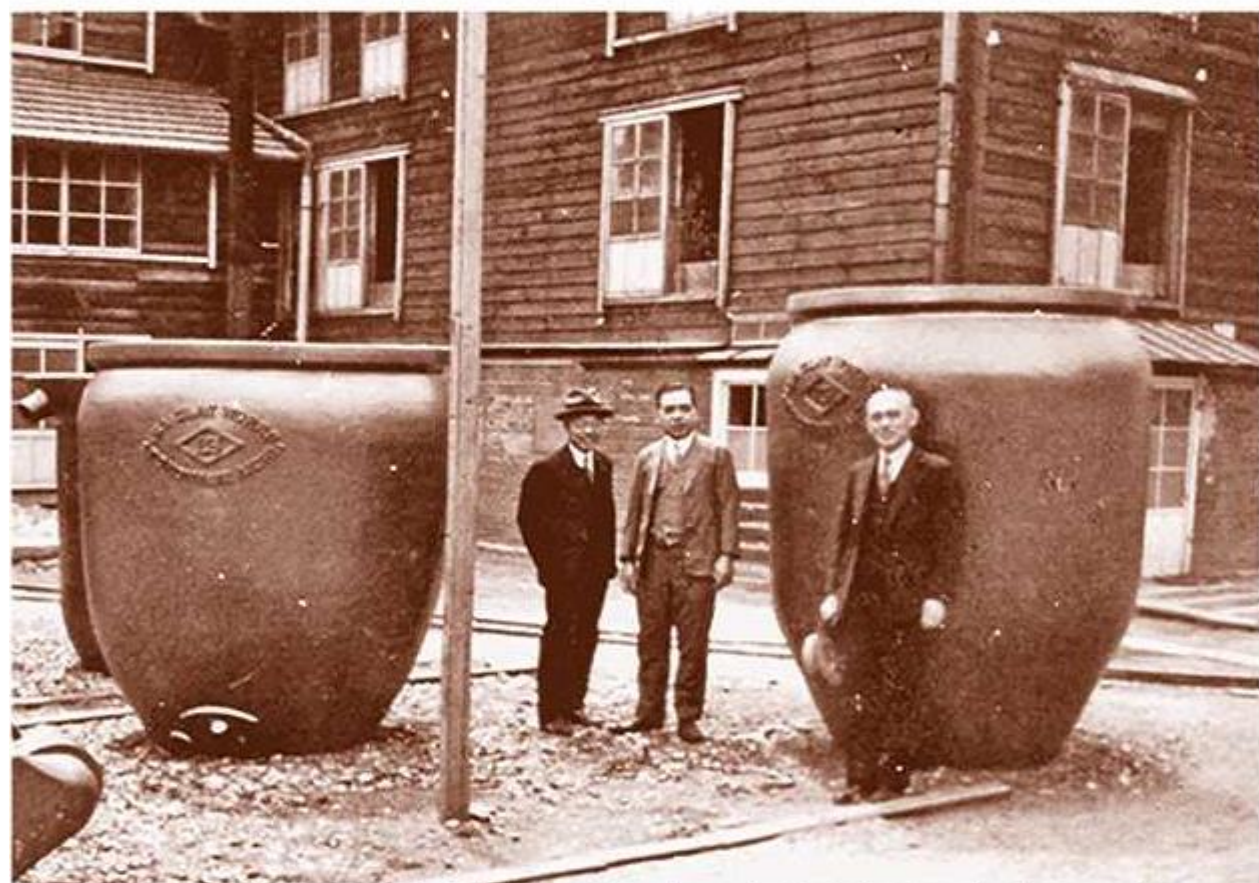


紋付きはかまの初之丞めだった。「工場を近代化と、背広にネクタイの長三郎。一九一七（大正六）産したい」。熱く語る親子年、かしまった身なりの伊奈親子が東京・麻布の大倉邸を訪れる。自力で事業を広げる余裕がなく、財力がある大倉に出資を仰ぐた

伊奈家は江戸中期から続

第6部 陶磁器を世界へ〈番外編〉

伊奈製陶を救った大倉和親



1937年ごろ、陶製貯蔵槽の前に立つ大倉和親（右）、伊奈長三郎（中）ら＝今の愛知県常滑市の伊奈製陶で（LIXIL提供）

く窯元で、大倉の父孫兵衛が陶磁器の買い付けを通じて初之丞と親しく、大倉自

身も長三郎と会っていた。初之丞の時代に土管の大量生産に成功すると、その技術を惜しげもなく地元の同業者に開放する。大倉はそれを高く評価していた。

長三郎の三男で元INAX社長の伊奈輝三（セキ）は「営利より社会の発展を優先する祖父と父の姿に共感

したのでは」と、大倉が出資に応じた背景を語る。

支援を受けた伊奈製陶は、二四年に株式会社となる。だが業績は振るわず赤字が続く。大倉は、私財を売り払っては赤字を穴埋めした。輝三は「お金を貸してくれたんじゃない、お金をくれた。援助がなければ会社はつぶれていた」と、草創期を物心両面で支えた大倉に感謝する。

伊奈製陶は終戦直後の四年九月、衛生陶器事業にも乗り出す。戦時中に軍需品造りで習得した技術を生かせるからだ。ただ、この分野ではすでに東洋陶器が地位を固めていた。グループを貫く「一業一社」の精神を気遣った長三郎が相談すると、大倉は意外にもあっさり参入を認める。「互いに競争し、衛生陶器の発展に貢献してほしい」

大倉が望んだ通り、両社は今日まで切磋琢磨を続け、世界に誇る高品質の水

洗トイレを生み出している。

大倉は四七年に伊奈製陶の役員を退く際、こんな言葉とともに持っていた株式の七割を従業員にただで配る。

「私の心からの謝礼を何かの形で表したい念願から、本社の株式を皆さまに差し上げることに致しました。本社の事業の成功と皆さんの幸福を念願することは日夜頭を離れません」

森村グループで大倉から従業員に株がただで配られたのは、この時だけ。輝三は「田舎の製陶会社を家族のように感じてくれていたのかもしれない」と大倉に思いをはせる。伊奈製陶から社名が変わったINAXは二〇〇一年、住宅建材大手のシステムと経営統合してグループを離れたが、輝三は「大倉さんの『事業は社会のために』の思いは今もしっかり受け継がれている」と語る。

（文中敬称略）